

# 東大 浜田純一氏



東大新聞研究所教授、同社会情報研究所長などを経て2009年から現職。専門はメディア法、情報法、情報政策。61歳。

## 編集委員が迫る

キャンパスをグローバルにし、タフな学生を育てていく― 壮大な構想の実現に向けて、東京大学が動き始めた。力ギとなるのが、入学時期を国際標準に合わせる、いわゆる「秋入学」の導入だ。海外留学を活性化し、留学生も増やす。その背景と可能性について浜田純一学長に聞いた。(聞き手 服部真)

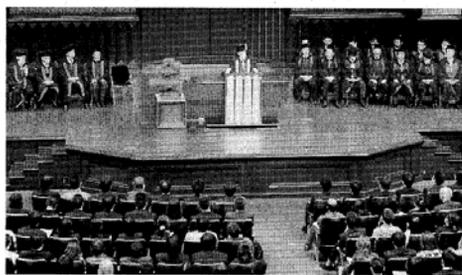
# 秋入学でタフな学生に

### 国際化待ったなし

秋入学の検討を始めたそもその理由は、

「大学の国際化は待ったなしという思いが中心にある。入学時期のずれを直せば、海外留学に行くのも、海外から留学に来るのも容易になる。何より、国際化への不転の姿勢を秋入学という形ではつきりと示すことは、学生たちへの後押しになるし、海外経験する学生への社会的な評価につながる」

「高校卒業から秋入学までの半年間のギャップは、タフな学生を作ることに生かせる。この期間に受験勉強とは違った知識の鍛え方をしてもいい。卒業時期も変わる可能性があるから、今の就職



東大の安田講堂で行われた秋季入学式。秋入学は、大学院では既に始まっている(4日)一片岡航希撮影

東大行動シナリオ 学長任期中の2015年3月までの目標。秋入学関連では「グローバル・キャンパスの形成」「タフな東大生の育成」が柱で、「15年までに全学生に国際体験を提供。20年までに留学生比率12%以上」「海外・異文化体験を通じてコミュニケーション能力や行動力を身につける」などを盛り込んでいる。

採用のあり方を社会全体で議論してもらった方がいい」とも考えた。

「東大の国際化の現状は、内向きといわれるが、学生の意識はどうか。

「研究面では既に当たり前のよう海外と競争し、刺激し合っているが、教育面では手当てが遅れていた。学生たちは決して内向きではない。社会の閉塞感や保守化のために、道を外れると戻れないという圧力が学生たちを内向きに見せている。国際化への学生の意識は強い。でも身動きができません、焦っている」

「タフな東大生になれ」と、学長に就任以来、訴えている。東大行動シナリオにも盛り込まれた。今の東大生はそんなに弱々しいのか。

「弱々しいというイメージはないが、グローバル化し変化する社会にチャレンジするために、可能性をもっと伸ばしてやりたい。タフさとは、知識を社会で実際の力にしていくために必要な力。ペーパーテストでいい成績を上げるのに注いだ力を、テスト以外でもどう発揮するか、正解がない課題にどう立ち向かうかを考えさせ、鍛えなければならぬ」

### チャレンジする力

「国際化でどう鍛える。英語で人々と話せるだけではなく、今まで生きてきた世界とは違った生き方、価値観や発想に触れさせる。それによって時代の変化に対する柔軟性や、新しいことにチャ

レンジする力も養われる」

「そのために必要なのが、異文化体験というわけだが、東大の学部で海外留学する学生は0.4%、外国人留学生も1.9%と少ない。

「ちょっとサマー・プログラムのつもりでも学期中で行けないとか、半年ぐらいの留学でも一年まるまる遅れてし

「世界で鍛える仕組み

## 社会と一緒に育てる

### 世界で鍛える仕組み

「ギャップイヤー」について。秋入学の副産物として生まれた半年間を有効活用できないかという話だった。

「社会と一緒に育てる」という発想だ。大学だけでなく企業、NPO、国など、いろんなところがかかわり、担い手になってもらう。質の高いメニューを用意し、人生には広い幅があるということを経験させてやりたい。インターンシップやNPOの手伝いでも、国内外で人とふれあ

「英語で人々と話せるだけではなく、今まで生きてきた世界とは違った生き方、価値観や発想に触れさせる。それによって時代の変化に対する柔軟性や、新しいことにチャレンジする力も養われる」

### ギャップイヤー

「合格した若者が、入学までの期間に様々な社会経験をすること。イギリスなどで盛んに行われている。」

「外国留学生が来るかどうかは、秋入学以外に、奨学金や宿舎などの支援で米国などに対抗できるかによる。伝統的に競争力のある物理や工学のほか、老年学、環境など新しい得意分野も魅力になる。海外での日本語教育の環境整備や、卒業後、日本でキャリア形成できることも重要だ」

「国際化も、学生のコミュニケーション力や行動力を鍛えることも、どの大学にも共通した課題だ。単独でやるつもりはない。たゞさんの大学と一緒にやるよう全力を尽くす。東大の役割は、議論の先頭に立って頑張ることだ」

「秋入学と一緒の実現を目指すのか。」「秋入学と同時に仕組みを作っていく。かりに秋入学の実現に時間がかかっても、学生を社会や世界で鍛える仕組みの一部は在学中にもすすませる。その実績は、秋入学

「ギャップイヤーから就職の仕組みまで全体を視野に入れて議論しないとうまくいかない。学内の作業チームが年内に出す中間報告をもとに、他大学・高校、企業、社会一般とも議論していく。5年後を目標にして検討と働き掛けを行っていく」

## 学生へのメッセージ



東大は国際化のために様々な提案をしており、秋入学はその一つだ。目指すのは、留学促進のみに国際標準に合わせるというよりも、国際化によってタフな学生を育てるといふ決意表明であり、異文化に触れてタフになってほしいという学生たちへのメッセージである。その意味で、ギャップイヤーの役割も大きい。魅力ある大学には、充実した教授陣や施設はもちろん、共に学び、競う、優秀な学生の存在が欠かせない。入学前に社会経験で視野を広げ、入学後は世界中の学生たちと渡り合う仕組みを、社会全体で議論し、作り上げたい。(服部

「議論の先頭に立つてメリットは。」

「東大以外の大学にとつてメリットは。」

「企業にとっては。」

「今後展開は。」